田辺元博士略年譜

明治十八年（一八八五年）

二月三日　田辺新之助の長男として東京に生まれる。

明治三十七年（一九〇四年）十九才（満年令、以下同じ）

七月　第一高等学校理科卒業

明治四十一年（一九〇八年）二十三才

七月　東京帝国大学文科大学哲学科卒業（初めは数学科に席をおく）、同月　同大学大学院入学

明治四十三年（一九一〇年）二十五才

九月「措定判断について」（哲学雑誌二八三号）

大正元年（一九一二年）二十七才

四月「相対性の問題」（哲学雑誌三〇二号）、六月　東京帝国大学大学院退学、八月「カントと自然科学」（哲学雑誌三〇六号）

大正二年（一九一三年）二十八才

八月　東北帝国大学理学部講師、九月「物理学的認識に於ける記載の意義〜キルヒホッフ及マッハの批評〜」（哲学雑誌三一九号）

大正三年（一九一四年）二十九才

二・三月「認識論に於ける論理主義の限界〜マールブルヒ派とフライブルヒ派の批評〜」（哲学雑誌三二四・五号）

大正四年（一九一五年）三十才

二〜四月「自然科学対精神科学・文化科学」（心理研究）、三・四月「自然数論」（哲学雑誌三三七・八号）、十一月『最近の自然科学』（岩波書店）

大正五年（一九一六年）三十一才

二月十四日　蘆野敬三郎次女ちよと結婚（新婦の田辺夫人は藤村操の従妹）、二・三・五月「連続・微分・無限」（哲学雑誌三四八・九・五一号）、五月「普遍について」（哲学研究二号）、十二月「負数及び虚数」（哲学雑誌三五八号）

大正六年（一九一七年）三十二才

一月「負数及び虚数」（哲学雑誌三五九号）、四月「数理の認識」（哲学研究一三号）、五・六月「変数及び函数」（哲学雑誌三六三・四号）、七月「道徳的自由」（思潮三号）、八月「時間論」（哲学研究一七号）、同月「再び道徳的自由について」（思潮四号）

大正七年（一九一八年）三十三才

一〜三月「幾何学の論理的基礎」（哲学雑誌三七一〜三号）、二・三月「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題」（哲学研究二三・四号）、五月「無限の世界」（思潮五号）、七月　文学博士、九月『科学概論』（岩波書店）、同月「個別的因果律の論理に就きて左右田博士の教を乞ふ」（哲学研究三〇号）、同月「カントの自由に就いて」（思潮九号）、十一月「ライプニッツ哲学の意義」（哲学研究三二号）

大正八年（一九一九年）三十四才

一月「真といふ語の意味」（思潮終刊号）、五月「意識一般に就いて」（哲学雑誌三八七号）、八月　京都帝国大学文学部助教

授、十一月「認識主観の問題」（哲学研究四四号）
（特殊講義）論理学
（講読）Kant, Kritik der reinen Vernunft
大正九年（一九二〇年）三十五才
二月「認識主観の問題」（哲学研究四七号）
（特殊講義）論理学
（講読）Kant, Kritik der reinen Vernunft
大正十年（一九二一年）三十六才
二・六・十一月「認識主観の問題」（哲学研究五九・六三・八号）
（特殊講義）推理論、無限連続の論理
（講読）Kant, Kritik der reinen Vernunft
大正十一年（一九二二年）三十七才
一月「歴史の認識について」（史林）、三月「実在の無限連続性」（思想六号）、「文化の概念」（改造）、三月　ヨーロッパ留学、ベルリン大学、特にフライブルク大学に学ぶ
大正十三年（一九二四年）三十九才
一月　帰国、四月「先験的演繹論に於ける直観と思惟との関係」（思想三〇号）、六～八月「カントの目的論」（哲学研究九九～一〇一号）、十月「現象学に於ける新しき転向」（思想三六号）、同月『カントの目的論』（岩波書店）
（特殊講義）現象学の発展
（講読）Kant, Kritik der Urteilskraft, 2. Teil
大正十四年（一九二五年）四十才
一月「認識論と現象学」（講座二四号）、四・七月「直観知と物自体」（哲学研究一〇九・一一二号）、五月『数理哲学研究』（岩波書店）、十月「ラスクの論理」（思想四〇号）
（特殊講義）純粋論理学と現象学
（講読）1. Kant, Kritik der Urteilskraft, (Dialektik der teleologischen Urteilskraft)
2. Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.
昭和元年（一九二六年）四十一才
六月「反省作用」（得能博士記念論文集）、十一月「直観知と物自体」（哲学研究一一八号）
（特殊講義）知覚と思惟
（講読）Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.
昭和二年（一九二七年）四十二才
二月「批判的方法に於ける循環論に就いて」（思想六四号）、三・五・七月「弁証法の論理」（哲学研究一三二・四・六号）、六月「感覚の概念について」（心理研究）、七月（飜訳）ポアンカレ『科学の価値』（岩波書店）、十一月　京都帝国大学文学部教授
（特殊講義）意識の歴史的社会的講造
（講読）Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. (Zum Vergleichen; derselbe, Grundriss des Eigentümlichen der Wissenschaftslehre in Rücksicht auf das theoretische Vermögen)

昭和三年（一九二八年）四十三才
一月「史学に於ける過去の認識」（哲学研究一四二号）、四月「歴史の認識に於ける概念の機能」（史林）、五・十一月「弁証法の論理」（哲学研究一四六・五二号）、十月「明証の所在」（哲学雑誌五〇〇号）、「儒教的存在論に就て」（高瀬博士還暦記念論文集）、十一月（飜訳）プランク「物理学的世界像の統一」（岩波書店）
（特殊講義）意識の歴史的社会的構造（前年度の続き）
（演習）Schelling, Das Wesen der menschlichen Freiheit.
昭和四年（一九二九年）四十四才
九月「弁証法の論理」（哲学研究一六二号）、十月「行為と歴史及び弁証法のこれに対する関係」（思想八九号）
（特殊講義）形而上学の諸問題（一学期）、歴史の合理性と非合理性（二学期）
（演習）Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften.
昭和五年（一九三〇年）四十五才
五月「西田先生の教を仰ぐ」（哲学研究一七〇号）、九月「道徳の主体と弁証法的自由」（思想一〇〇号）
（特殊講義）心身関係論
（演習）Hegel, Enzyklopädie.
昭和六年（一九三一年）四十六才
四月「綜合と超越」（朝永博士還暦記念論文集）、五月「ヘーゲルに於ける理性的と現実的との一致」（ヘーゲルとヘーゲル主義）、十月「ヘーゲル哲学と絶対観念論」（思想一一三号）、同月「人間学の立場」（理想二七号）、十二月「ヘーゲル判断論の理解」（哲学雑誌五三八号）、十二月「ヘーゲルの絶対観念論」（哲学研究一八九号）
（特殊講義）心身関係の人間学的研究
（演習）Hegel, Enzyklopädie.
昭和七年（一九三二年）四十七才
一月『ヘーゲル哲学と弁証法』（岩波書店）、七月「哲学通論」（岩波哲学講座）、同月「個体的本質の弁証論」（スピノザとヘーゲル）、十一月「図式『時間』から図式『世界』へ」（哲学研究二〇〇号）
（特殊講義）世界図式の構造
（演習）Schelling, Bruno
昭和八年（一九三三年）四十八才
六月「哲学への通路」（思想一三三号）、十二月『哲学通論』（岩波書店）
（特殊講義）認識・存在・行為
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和九年（一九三四年）四十九才
五月「数学と哲学との関係」（岩波数学講座）、七月（講演）歴史の意味（文部省主催、日本文化教官研究講習会）、十月「宗教と文化との関係〜バルトとブルンナーの論争に因みて〜」（思想一四九号）、十一・二月「社会存在の論理」（哲学研究二二四・五号）

（特殊講義）認識の形而上学
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十年（一九三五年）五十才
一月「社会存在の論理」（哲学研究二二六号）、十月「古代哲学の質料概念と現代物理学～自然弁証法への一着眼点～」（思想一六一号）、十～十二月「種の論理と世界図式」（哲学研究二三五～七号）、十一月「存在論の第三段階」（理想特輯号）、十二月（講演）思想史的に見たる数学の発達（文部省主催、高校数学教授のための数学講習会）
（特殊講義）意識の形而上学的構造
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十一年（一九三六年）五十一才
十月「ヒューマニズムに就いて」（思想一〇三号）、同月「常識・科学・哲学～当来の日本哲学の方向～」（日本評論）、十～十二月「論理の社会存在論的構造」（哲学研究二四七～九号）、十一月（講演）徳性としての科学（文部省主催、日本文化教官講習会）
（特殊講義）論理学の発達
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十二年（一九三七年）五十二才
二月「世界観と世界像」（科学七巻五号）、五月「蓑田氏及び松田氏の批判に答ふ」（原理日本）、六月「量子論の哲学的意味」（思想一八一号）、九月「『種の論理』に対する批評に答ふ」（思想一八五号）、十月「科学政策の矛盾」（改造）、十～十二月「種の論理の意味を明かにす」（哲学研究二五九～六一号）、十一月『哲学と科学との間』（岩波書店）
（特殊講義）近代科学の論理
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十三年（一九三八年）五十三才
五月（講演）科学思想に就て（内務省主催、警察幹部講習会）、七月（講演）日本哲学の先蹤（日本諸学振興会）、九月「カントからヘーゲルへの論理」（波多野博士献呈論文集）、十月「永平正法眼蔵の哲学」（哲学研究二七一号）、同月「実存哲学の限界」（哲学雑誌六二〇号）
（特殊講義）歴史的空間時間
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十四年（一九三九年）五十四才
五月『正法眼蔵の哲学私観』（岩波書店）――（前年七月の講演「日本哲学の先蹤」に手を加えたもの）、五・六月（講演）歴史的現実（京大学生課主催、日本文化講義）、十月「物理学と哲学」（岩波物理学講座第十三巻）、十～十二月「国家的存在の論理」（哲学研究二八三～五号）
（特殊講義）実存哲学対現実哲学
（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.
昭和十五年（一九四〇年）五十五才
六月（講演）哲学の方向（教学局主催、日本諸学振興委員会第二回哲学公開講演）、十～十二月「永遠・歴史・行為」（哲学研究二九五～七号）、十一月「倫理と論理」（岩波倫理学講座第四

巻）

（特殊講義）倫理の弁証

（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.

昭和十六年（一九四一年）五十六才

十月「国家の道義性」（中央公論）、同月「思想報国の道」（改造）、十・十二月「実存概念の発展」（哲学研究三〇七・九号）

（特殊講義）「実存の超越性と内在性」

（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.

昭和十七年（一九四二年）五十七才

（特殊講義）（四月～九月）世界の論理的構造、（十月～三月）絶対知

（演習）（四月～九月）Hegel, Phänomenologie des Geistes

（十月～三月）哲学諸問題討議（実際はヘーゲの右の書を使う）

昭和十八年（一九四三年）五十八才

六月（講演）哲学について（京大開校記念日公開講演）

（特殊講義）自覚の論理

（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.

昭和十九年（一九四四年）五十九才

（特殊講義）懺悔道

（演習）Hegel, Phänomenologie des Geistes.

昭和二十年（一九四五年）六十才

三月　京都帝国大学文学部教授退官

昭和二十一年（一九四六年）六十一才

一月「日本民主主義の確立」（潮流創刊号）、三月「政治哲学の急務」（展望）、同月　京都大学名誉教授、四月『懺悔道としての哲学』（岩波書店）、七月「社会党と共産党との間」（改造）、八月「種の論理の実践的構造」（哲学季刊第二号）、同月「絶対無の立場と唯物弁証法～森宏一氏に答ふ～」（真善美）、十一月「実存の単独性と無の社会性」（展望）

昭和二十二年（一九四七年）六十二才

一月「宗教の倫理性」（展望）、同月「知識階級現在の任務」（潮流）、四～六月「プラトニズムの自己超越と福音信仰」（展望）、五月　学士院会員、九月「キリスト教とマルクシズムと日本仏教」（展望）、十一月『種の論理の弁証法』（秋田屋）、十二月『実存と愛と実践』（筑摩書房）

昭和二十三年（一九四八年）六十三才

一・二月「キリスト教の弁証序論」（展望）、五月「キリスト教と私」（展望）、六月『キリスト教の弁証』（筑摩書房）、十一月「局所的微視的～現代的思考の特徴～」（展望）

昭和二十四年（一九四九年）六十四才

三月『哲学入門～哲学の根本問題』（筑摩書房）、四月「古典力学の弁証法」（基礎科学二号）、六月「『力学の哲学』について」（展望）、七月『哲学入門～歴史哲学・政治哲学』（筑摩書房）

昭和二十五年（一九五〇年）六十五才

三月「哲学と科学と宗教」（哲学講座第六巻、筑摩書房）、四月『哲学の入門～科学哲学・認識論』（筑摩書房）、十一月　文化勲章受賞、十一・十二月「ヴァレリイの詩『若きパルク』」（展望）

昭和二十六年（一九五一年）六十六才
三月『ヴァレリイの芸術哲学』（筑摩書房）、九月十七日　夫人ちよ死去
文化功労者
昭和二十七年（一九五二年）六十七才
四月『哲学入門〜宗教哲学・倫理学』（筑摩書房）
昭和二十九年（一九五四年）六十九才
十一月『数理の歴史主義展開』（筑摩書房）
昭和三十年（一九五五年）七十才
五月『理論物理学新方法論提説』（筑摩書房）、十月『相対性理論の弁証法』（筑摩書房）
昭和三十二年（一九五六年）七十二才
六月　西独フライブルク大学創立五百年祭に際して同大学名誉博士
昭和三十三年（一九五八年）七十三才
五月「メメント・モリ」（信濃教育）
昭和三十四年（一九五九年）七十四才
九月 "Todesdialektik" ("Martin Heidegger Zum 70. Geburtstag")
昭和三十五年（一九六〇年）七十五才
十月「禅源私解」（鈴木大拙記念論文集）
昭和三十六年（一九六一年）七十七才
一月　脳軟化症発病、八月『マラルメ覚書』（筑摩書房）
昭和三十七年（一九六二年）七十八才
四月二十九日午後七時四十六分逝去、十一月「生の存在学か死の弁証法か」（哲学研究四八三号）